©Martin Richardson

Tadaaki OTAKA

Conductor

尾高忠明

指揮

1/17 1/18

1947年生まれ。国内主要オーケストラへの定期的な客演に加え、ロンドン響、ロンドン・フィル、BBC響、ベルリン放送響など世界各地のオーケストラに客演。

1991年度サントリー音楽賞受賞。1997年には英国エリザベス女王より大英勲章CBEを授与された。1999年には英国エルガー協会より日本人初のエルガー・メダルを授与され、1993年王立ウェールズ音楽演劇大学より名誉会員の称号、ウェールズ大学より名誉博士号、2012年有馬賞（NHK交響楽団）、2014年北海道文化賞、2018年度関西「音楽クリティック・クラブ賞」本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、2019年JXTG音楽賞洋楽部門本賞などを受賞。2021年11月、旭日小綬章を受章。

現在、N響正指揮者、大阪フィル音楽監督、BBCウェールズ・ナショナル管桂冠指揮者、札響名誉音楽監督、東京フィル桂冠指揮者、読響名誉客演指揮者、紀尾井ホール室内管桂冠名誉指揮者。また2021年から「東京国際音楽コンクール〈指揮〉」の審査委員長に就任。複数の大学で後進の指導も積極的に行っている。

Tadaaki Otaka was born in 1947. He has conducted all major Japanese Orchestras. He is also a popular figure throughout the world particularly in the UK, where he is invited as Guest Conductor to London Symphony, London Philharmonic, and BBC Symphony, among others. Otaka made his Proms debut with BBC National Orchestra of Wales in 1988. He also received invitations to Rundfunk-Sinfonieorchester Berlin, Bamberg Philharmonic and many others. In 1997, he was awarded the CBE, in recognition of his outstanding contribution to British musical life.

C Series

第940回 定期演奏会Cシリーズ
Subscription Concert No.940 C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2022年1月17日(月) 14:00開演
Mon. 17. January 2022, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

A Series

第941回 定期演奏会Aシリーズ
Subscription Concert No.941 A Series

東京文化会館

2022年1月18日(火) 19:00開演
Tue. 18. January 2022, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 尾高忠明 Tadaaki OTAKA, Conductor
チェロ ● 横坂 源 Gen YOKOSAKA, Violoncello
コンサートマスター ● 四方恭子 Kyoko SHIKATA, Concertmaster

ディーリアス(ビーチャム編曲):歌劇『村のロメオとジュリエット』より間奏曲「楽園への道」(10分)
Delius (arr. by Beecham): The Walk to the Paradise Garden from "A Village Romeo and Juliet"

エルガー:チェロ協奏曲 ホ短調 op.85 (28分)
Elgar: Cello Concerto in E minor, op.85

Ⅰ Adagio - Moderato
Ⅱ Lento - Allegro molto
Ⅲ Adagio
Ⅳ Allegro - Moderato - Allegro, ma non troppo

休憩 / Intermission (20分)

チャイコフスキー:交響曲第6番 ロ短調 op.74《悲愴》(45分)
Tchaikovsky: Symphony No.6 in B minor, op.74, "Pathétique"

Ⅰ Adagio - Allegro non troppo
Ⅱ Allegro con grazia
Ⅲ Allegro molto vivace
Ⅳ Finale: Adagio lamentoso

※当初の発表から演奏者および曲目の一部が変更になりました。

主催:公益財団法人東京都交響楽団
後援:東京都、東京都教育委員会
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

〈アンケートのお願い〉

本日はご来場くださり、誠にありがとうございます。今後の参考にさせていただきますので、お客様のご意見・ご感想をお寄せください。お手持ちの携帯電話やスマートフォンなどから2次元コードを読み取りいただくか、下記URLからもご回答いただけます。

https://www.tmso.or.jp/j/questionnaire/

Gen YOKOSAKA

Violoncello

横坂 源

チェロ

©Takashi Okamoto

桐朋学園女子高等学校（男女共学）を卒業後、ソリスト・ディプロマ・コースを経て、シュトゥットガルト国立音楽大学およびフライブルク国立音楽大学で研鑽を積む。鷲尾勝郎、毛利伯郎、ジャン＝ギアン・ケラスの各氏に師事。2002年、全日本ビバホールチェロコンクールにおいて史上最年少で第1位を受賞。2009年、全ドイツ学生音楽コンクール室内楽部門第１位。2010年、ミュンヘン国際音楽コンクール第２位。これまでに出光音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、ホテルオークラ音楽賞を受賞。

2019/20年に演奏活動20年を迎え、スザンネ・ツァーガー・スヴィリドフのチェロ協奏曲《つばき》の委嘱・世界初演をヴュルト・フィル（Würth Philharmoniker／ドイツ）と、日本初演を齋藤友香理／東響と行った。また、ミシェル・ルグランのチェロ協奏曲（山田和樹／日本フィル）、パスカル・デュサパンのチェロ協奏曲《アウトスケイプ》（杉山洋一／都響）の、それぞれ日本初演を果たした。

Gen Yokosaka began to play cello at the age of 4 and studied with Katsuro Washio and Hakuro Mori at Toho Gakuen School of Music. Gen also studied at Staatliche Hochschule für Musik und Darstellende Kunst Stuttgart and Hochschule für Musik Freiburg under the tutelage of Jean-Guihen Queyras. Gen went on to win numerous competitions including Viva Hall Cello Competition in 2002 in which he became the youngest ever winner at 15. He also won the 2nd prize of Internationaler Musikwettbewerb der ARD München in 2010.

ディーリアス（ビーチャム編曲）：歌劇『村のロメオとジュリエット』より間奏曲「楽園への道」

「敵対する集団に属する若い男女の恋がたどる悲劇」を結晶化させたのがシェークスピアの『ロメオとジュリエット』である。以後これに倣った幾多の芸術作品が作られ、音楽も例外ではない。ベルリオーズの劇的交響曲やチャイコフスキーの幻想序曲、ベッリーニとグノーのオペラ、プロコフィエフのバレエはもとより、ヴェルディ『アイーダ』、ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』、ドビュッシー『ペレアスとメリザンド』も同類であろう。ディーリアスの『村のロメオとジュリエット』もこの系譜に属する。

フレデリック・ディーリアス（1862~1934）はマーラーやリヒャルト・シュトラウスと同世代の作曲家。イングランド北部ヨークシャーのブラッドフォードで生まれたため「英国の作曲家」とされているが、ドイツ系移民の家庭に生まれ、青年時代に米国フロリダの農園で働き、ヨーロッパに戻ってライプツィヒ音楽院に学び、パリで活動した。後半生はパリ近郊の小村グレ=シュル=ロワンに住み、その地で没した、コスモポリタンな作曲家である。ライプツィヒではグリーグと、パリではドビュッシーと交流し、彼らからの影響も垣間見える。ワーグナーに熱烈に傾倒したため、とりわけ和声の扱いで「イングランドのワグネリアン」と呼ばれることもある（「楽園への道」には『トリスタンとイゾルデ』の「愛の死」と同一の和声進行がある）。しかし、彼の本質は演劇性や構築性ではなく、洗練された抒情性にあった。

ディーリアスは、教養小説『緑のハインリヒ』で知られるスイスの作家ゴットフリート・ケラー（1819~90）がドイツ語で書いた短編集『ゼルトウィーラの人々』第1巻（1856）中の「村のロメオとユリア（Romeo und Julia auf dem Dorfe）」に感銘を受けた。舞台はスイスの僻村。土地をめぐって対立するふたつの農家の息子サリと娘ヴレリが恋に落ち、現世では結ばれないと悟って心中する。閉鎖的な村社会、土地争い、村八分、定期市、放浪者たち、とヴェリズモ・オペラのような筋立てである。狂言回しとして謎めいた放浪のヴァイオリニストが登場し、スイスの山間の村の自然の移ろいと人間たちの営みが対照されながら話が進んでいく。ディーリアスは自ら台本を書き、1900~01年に6場からなるオペラとして完成させるが、初演はやや遅れて1907年にベルリンで行われた。

第5場から第6場への場面転換のために、ディーリアスが初演の直前に間奏曲として書き足したのが「楽園への道」である。第5場は定期市。着飾った大勢の人々が繰り出し、見世物や屋台も出て大変な賑わい。浮かれた歌や音楽が聞こえてくる。サリはヴレリに指環を買ってやり、共に踊ろうとする。しかし、村八分になった自分たちの惨めな境遇とかけ離れた華やいだ空気にいたたまれなくなり、その場を離れ、2人はとぼとぼと「楽園（Paradise Garden）」へと向かう。第6場の「楽園」

とは村はずれにある居酒屋の店名で、そこでは夜通し踊ることができる。到着すると、村の掟に縛られない放浪者たちが宴を開いており、恋人たちに仲間に入らないかと語りかける。彼らに加わることにも躊躇したふたりは「楽園」でいっときの幸福に浸った後、小舟に乗って川に漕ぎ出し、船底の栓を抜いて水中に沈んでいく。

「楽園への道」は、悲哀と諦念と愛の陶酔が織り合わされた耽美的な音楽である。それまでの5つの場で登場した様々なモティーフが登場する。冒頭、ホルンとファゴットがゆっくりと*p*で最初の主題を提示し、イングリッシュホルンが受ける。曲全体を通して木管楽器群は独奏的な動きを見せる。やがてクラリネットが3連符の上行音型で始まる「愛のテーマ」を*mp*で奏し、第1ヴァイオリンが続く。ハープの伴奏と共に「愛のテーマ」が様々な楽器で繰り返され、うねるように高まっていき、*ff*のトゥッティで頂点に達する。中間部は「愛のテーマ」のモティーフによる穏やかな音楽となり（オペラでは間奏曲の途中で短時間ながら幕が上がり、サリとヴレリが口づけを交わして「楽園」へと立ち去る場面である）、やがて2度目のクライマックスを迎え、トランペットが輝かしく「愛のテーマ」を奏する。音楽は徐々に減衰し*pppp*で消え入る。

『村のロメオとジュリエット』の初演がベルリンで行われたことが示すように、ディーリアスは当初ドイツで評価された。この作品の英国初演を指揮し、生地でディーリアスの音楽を広めることに貢献したのはトマス・ビーチャム（1879~1961）である。彼はオーケストラの演奏会で取り上げやすくするために「楽園への道」を3管から2管編成に編曲した。本日演奏されるのは、そのビーチャム編曲版である。

（等松春夫）

作曲年代：1906年（全曲の作曲は1900～01年）
初　　演：全曲／1907年2月21日　ベルリン
フリッツ・カッシーラー指揮　ベルリン・コーミッシェ・オーパー
全曲の英国初演／1910年2月22日　ロンドン
トマス・ビーチャム指揮　ロイヤル・オペラ・ハウス（コヴェント・ガーデン）
楽器編成：フルート2、オーボエ、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ハープ、弦楽5部

エルガー：チェロ協奏曲 ホ短調 op.85

ヴァイオリンを習ってはいたものの、作曲家としての職業的訓練を積むのが比較的遅かったイギリスのエドワード・エルガー（1857~1934）。高い知名度を得るきっかけとなったのは、1899年に初演された《エニグマ》変奏曲であり、このときすでにエルガーは42歳になっていた。ブラームス（1833~97）やR.シュトラウス（1864~1949）など、同時代のドイツの管弦楽作品に範をとった大規模な交響曲などで

20世紀初頭に成功を収めるも、第一次世界大戦（1914～18）の時期には都会の生活に疲弊し、イングランド南部ウェスト・サセックスのフィトルワースに屋敷を借り、ここで英気を養う。

チェロ協奏曲は1918～19年、大戦末期に手がけられ、同時期に作曲した弦楽四重奏曲ホ短調op.83を演奏したチェロ奏者フェリックス・サモンド（1888～1952）の助言によって完成、初演された。

ホ短調（♯1つ）という調は、弦楽器の有名な協奏曲では数少ない（メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲など）。あるいは、ロ短調（♯2つ）で同じ2管編成を有するドヴォルザークのチェロ協奏曲を意識したものかもしれない。

第1楽章　アダージョ～モデラート　冒頭におかれた短い独奏チェロの序奏は、曲全体を支配する陰鬱な雰囲気を代表するかのような響きを持ち、また第2楽章冒頭や第4楽章の最後にも登場し、作品全体を統一する主要モティーフの役割をも果たす。この主題に導かれ、おずおずとヴィオラが歌い始める第1主題は、都会暮らしで体調を崩し、静養していた時期に手がけられた。8分の9拍子（時に8分の12拍子）による、引きずるような、ためらうような旋律と、室内楽的な管弦楽の響きは、みずからの音楽が向かうべき先をあてどなく探しているかのよう。

第2楽章　レント～アレグロ・モルト　全体で4つの楽章を有した、本格的な交響曲とも呼ぶべき体裁を整えた曲ではあるが、第1楽章から第2楽章にかけては切れ目なく演奏されるため、協奏曲の通例たる3楽章形式とも考えられる。主要モティーフが変化した4分の4拍子の無窮動を、ひたすら細かい音符として独奏チェロがスピッカート（弓をはずませながら急速に歯切れよく奏すること）で刻み続ける。

第3楽章　アダージョ　この楽章だけは主調のホ短調からやや遠い変ロ長調（♭2つ）に設定されている。伴奏はクラリネット、ファゴット、ホルンが各2本と弦楽5部だけに制限され、独奏チェロは徐々に下降しながら、時にオクターヴの跳躍を挟む、ひたすら息の長い旋律を紡ぎ続ける。

第4楽章　アレグロ～モデラート～アレグロ、マ・ノン・トロッポ　前楽章の変ロ長調を変ロ短調で引き継いだ短い序奏の後、「レチタティーヴォのように」と記されたチェロの独奏が挟まれ、やがて軽快な主要主題がホ短調で登場する。この主題が何度も登場することを考えれば、変形されたロンド形式と考えるのが妥当か。終結部前に、第3楽章の主題と第1楽章冒頭が続けて回顧されるところなど、《エニグマ》変奏曲と同様、その真意は謎めいている。

（広瀬大介）

作曲年代：1918～19年

初　　演：1919年10月27日　ロンドン
フェリックス・サモンド独奏　作曲者指揮　ロンドン交響楽団

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部、独奏チェロ

チャイコフスキー：
交響曲第６番 ロ短調 op.74《悲愴》

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840~93）の辞世の作となったこの交響曲が標題を秘めていることは、作曲者自身が示唆している。第1楽章のスケッチを終えてまもない1893年2月11日（ロシア旧暦）の手紙に「この曲には標題があるが、それは聴く人の想像に任せ、謎のままにしておく。その標題はまことに主観的なもので、私は旅行中、この曲を構想しながらひどく泣いた」と記されているのだ。構想中に泣くほどに主観的、とは尋常ではないが、この交響曲がきわめて感情的な、死にまつわる標題を秘めていることは、作品そのものからも明らかだ。

第1楽章の暗く激しい闘争的性格や展開部でのロシア正教の死者のための聖歌の引用、第4楽章における「ラメントーソ（悲しみに沈んだ）」の表記どおりの重々しさと感極まったような感情表現、そして事切れるような終結。何より伝統的な楽章配置を敢えて崩してまでラメントーソの緩徐楽章を最後に置いたことに、劇的な闘争→死といった標題性が浮かび上がる。

実はこの交響曲の前に、チャイコフスキーは《人生》という題の交響曲を構想しており、そのスケッチに“終曲=死、崩壊の結果”“終楽章は消え行くように閉じる”といったメモが記されていた。この交響曲は断念されたが、新たに書き始められた第6番にその標題上のアイデアが受け継がれたことは間違いない。また完成後の1893年9月、彼はコンスタンチン・ロマノフ大公（1858~1915）から詩人アレクセイ・ニコラエヴィチ・アプーフチン（1840~93）を追悼する《レクイエム》の作曲を持ちかけられているのだが、近々初演される交響曲第6番がレクイエム的性格を持っているという理由で断わっている。彼にとってこの曲は一種のレクイエムだったことがこのことから推測される。

こうしたことからも作品のテーマが死に関わるものであることは明らかといえるのだが、チャイコフスキーは結局、「悲愴（パテティック）」（ただこれに相当するロシア語の“パテティーチェスカヤ”は激しい感情性を表すもので、和訳の“悲愴”とニュアンスが異なる）という題以外は、先の手紙のとおり具体的な標題内容を謎のままにした。この題は従来、初演後に実弟モデスト（1850~1916）の提案によって付けられたとされていたが（これはモデストが著した『チャイコフスキー伝』に基づく）、近年の研究では初演前の1893年9月20日（ロシア旧暦）に出版社ユルゲンソンがチャイコフスキーに宛てた手紙の中にすでに「悲愴」という題が現れることからみて、作曲者自身が以前から「悲愴」という題を考えていたものと思われる。

チャイコフスキーが自らこの曲の初演を指揮したわずか9日後に突然世を去ってしまったことも、作品の特質との関わりから様々な憶測を生んできた。コレラ感染による病死という公式発表に対し、早くから自殺説も囁かれ、1980年代にはそうした自殺説が、同性愛に関する裁判で服毒自殺を命じられたという新説として再浮上、その説

に基づいて《悲愴》を異常な状況下の産物として解釈する見方も一時広まった。この説は様々な反証ゆえに今では問題にされなくなったが、こうした説につい結び付けたくなるほどにこの作品は切実なまでに悲劇的かつ感情的な性格を持ったものであるといえるだろう。

第1楽章　アダージョ～アレグロ・ノン・トロッポ　ロ短調　沈鬱な序奏に始まる。主部はソナタ形式で、不安に満ちた第1主題と切々たる第2主題（アンダンテ）が対照を作り出し、劇的な展開部では、前述のように死者のためのロシア聖歌も引用されて悲劇性が強調される。

第2楽章　アレグロ・コン・グラーツィア　ニ長調　4分の5拍子のワルツ楽章で、優美さの中に不安な情感を漂わせている。

第3楽章　アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ　ト長調　4分の4拍子のマーチと8分の12拍子のスケルツォの動きを重ね合わせた祝典的な楽章。その華麗な明るさと高揚感は、次の楽章の悲劇を一層際立たせる役割を果たすことになる。

第4楽章　フィナーレ／アダージョ・ラメントーソ　ロ短調　悲痛なフィナーレで、むせび泣くような主題（その旋律は第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが一音ずつリレーする形で形成される）で始まり、重々しく進む。ニ長調の副主題も幸福な日々を懐かしむようでやるせない。最後近くタムタムが死を暗示し、金管の厳かな葬送風の響きを経て、短調の副主題によって息絶えるように終わる。

なお自筆譜ではこの楽章の冒頭は当初アンダンテと記されていたものが抹消されて他人の手でアダージョに書き換えられているが、チャイコフスキーが生前承認していたピアノ二重奏編曲版の楽譜がアダージョであることや、初演プログラムにもアダージョと印刷されていることから、彼自身が認めた変更と考えられる。

（寺西基之）

作曲年代：1893年

初　　演：1893年10月28日（ロシア旧暦16日）　サンクトペテルブルク　作曲者指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

Delius (arr. by Beecham): The Walk to the Paradise Garden from "A Village Romeo and Juliet"

Frederick Delius: Born in Bradford, England, January 29, 1862; died in Grez-sur-Loing, France, June 10, 1934

Frederick Delius is often referred to as "the English Impressionist," but he was really more cosmopolitan than English. Born the fourth of 14 children to German parents in England as Fritz Théodor Albert Delius, he was destined by his father for the wool business. Finding this distasteful, he emigrated to Florida to work an orange plantation. Here he studied the organ and violin, and began composing. Having determined to make music his career, Delius then undertook several years of study at the Leipzig Conservatory, following which he went to Paris to assimilate its rich cultural life. In 1897 he settled in Grez-sur-Loing, a small village southeast of Paris, where he remained until his death many years later.

Delius' music is marked by delicacy, restraint, refinement and a color palette consisting almost exclusively of pastels. Many of his best works are infused with a languid, pastoral beauty, a quality found throughout the exquisite miniatures on this concert.

The story of Romeo and Juliet has fascinated artists of all stripes for centuries. Every age recreates the story in its own image, one of the most famous being Bernstein's *West Side Story*. Like Bernstein's treatment, Delius' opera *A Village Romeo and Juliet* is set amidst lower-class people, where passions run high and inhibitions are few.

This was the fourth of Delius' six operas, and the one generally acknowledged to be his masterpiece. It is occasionally performed in Europe, and there have been at least three complete recordings to date, including one conducted by Sir Thomas Beecham. "The Walk to the Paradise Garden" is the crown jewel from the opera, and probably the best-known music of Delius. Although technically twentieth-century opera (it was premiered in Berlin in 1907, in German translation), its music is steeped in lyrical romanticism. The libretto, written by Delius, was derived from a story by the Swiss author Gottfried Keller (1819-90). The setting is the Swiss Alps. As in Shakespeare's and Bernstein's stories, we find lovers from two feuding families, in this case farmers quarreling over a small strip of land.

The exquisite little tone-poem "Walk to the Paradise Garden" separates Scenes Five and Six of the opera (there are no "acts"). Both music and title suggest the arrival of the lovers at the pearly gates in a sort of *Liebestod*, but the facts are different. Sali and Vreli, desperately poor and hopelessly in love, leave the fair ground, where their impoverished appearance is attracting

stares, and walk to a dilapidated inn known as the Paradise Garden. Here the lovers will make their fateful decision, amidst the transfigured beauty of nature, to leave the cruel world of the here and now in order to be happy together in the afterlife. Beecham's arrangement of this music scales Delius' large orchestra down to smaller size.

Elgar:
Cello Concerto in E minor, op.85

Ⅰ Adagio - Moderato
Ⅱ Lento - Allegro molto
Ⅲ Adagio
Ⅳ Allegro - Moderato - Allegro, ma non troppo

Edward Elgar: Born in Broadheath, near Worcester, June 2, 1857; died in Worcester, February 23, 1934

Elgar's large catalogue contains just two concertos, one each for violin and cello. Both are masterpieces, both rank among the greatest of their kind from the twentieth-century, and both are in minor keys (the Violin Concerto is in B minor). They are separated by only a decade, but they seem to come from different worlds. The Violin Concerto is an expansive, largely extrovert work lasting about fifty minutes (possibly the longest such work in the standard repertory), while the Cello Concerto is about half that length and is profoundly inward-looking.

Written between March of 1918 and August of 1919, the Cello Concerto was Elgar's last important composition. He was to live for another fifteen years, but with the death in 1920 of his wife, who had been such a deep source of both personal and professional aid to the composer, inspiration to create seemed to have left Elgar. Indeed, moods of despair, disillusionment and inferiority had haunted him throughout his life — lack of social status, insecurity about the popularity of his music, and especially the Great War contributed to these moods. Old friends were dying, many of his German friends and supporters were now enemies as a result of the war, he was in financial straits, he suffered from a disease of the ear that caused dizziness and headaches, and his creative energy had dimmed. Into his Cello Concerto Elgar poured his most personal utterances and the sense of resignation that affects many of those in the autumn of their lives. The mournful, poignant tone of the cello seems to emphasize this quality, further heightened by the restraint with which Elgar uses the orchestra in this work.

Though unsuccessful at its premiere, due largely to lack of proper rehearsal time, the concerto quickly became a favorite with cellists and audi-

ences alike, and it has remained one of the Elgar's best-known works. The first performance took place in Queen's Hall, London, on October 27, 1919 with the composer conducting the London Symphony. Felix Salmond was the soloist. Ten years later, the great English violist, Lionel Tertis (1876-1975), undertook to make a transcription for his instrument (at the time repertory for solo viola was extremely scant).

The concerto is in four movements, each distinctive, each with its own hallmarks of Elgar's inimitable style. The first opens with an *Adagio*, beginning with a somber but striking passage for the soloist alone and stretching across all four strings of the instrument simultaneously. Violas pick up the theme and weave it into a quietly flowing line. "In its world-weary way," writes Michael Kennedy, "it is the music of autumn smoke and falling leaves." Woodwinds initiate the second theme, somewhat brighter in mood.

The second movement follows after the briefest of pauses, and is notable for the alternation of its light, scherzo-like passages of quicksilver writing and deft orchestration with a heavier, jaunty theme. Donald Francis Tovey called the movement "impish."

The next movement stands in greatest possible contrast. Though only sixty bars in length, this *Adagio* is one of Elgar's most sublime pages. To quote Kennedy again, it is "a lament for thoughts that lie too deep for tears, perfectly suited to the cello at its most songfully sustained, and ending with a dominant cadence, as if the tonic key was too positive."

The finale is cast in rondo form, with its swaggering, self-assured principal theme alternating with contrasting episodes. In a gesture of nostalgia, Elgar brings back the solo cello's theme of broken chords that opened the concerto, but a strong, final recurrence of the rondo theme sweeps away the memory of things past with a grand flourish.

Tchaikovsky: Symphony No.6 in B minor, op.74, "Pathétique"

Ⅰ Adagio - Allegro non troppo
Ⅱ Allegro con grazia
Ⅲ Allegro molto vivace
Ⅳ Finale: Adagio lamentoso

Piotr Ilyich Tchaikovsky: Born in Votkinsk, May 7, 1840; died in St. Petersburg, November 6, 1893

Tchaikovsky began working on his last symphony in February of 1893, and conducted the first performance on October 28 in St. Petersburg. It was only mildly successful, due to a puzzling Adagio finale that ended softly, an indifferent

orchestra and the composer's consequent lack of enthusiastic leadership. Nevertheless, he felt that it was "the best and especially the most sincere of my works. I love it as I have never loved any of my other musical creations."

Much conjecture has surrounded the "program" of Tchaikovsky's Sixth Symphony. He initially called the work *Program Symphony*, but then decided that with no declared program to go with it, the title was a contradiction in terms. He then considered calling it the "Tragic," but when his brother Modeste suggested "pateticheskiy," the composer exclaimed, "Excellent, Modya, bravo, pateticheskiy!" The word was inscribed immediately on the score's title page and taken to the publisher Jurgenson. One day later, the composer had a change of heart and asked Jurgenson to remove the word "if it's not too late." But Jurgenson, no doubt with an eye towards sales from a catchy title, let the work go out as "Symphonie pathétique," and as such the name has stuck. The word *pathétique*, incidentally, derives from the Greek *patheticos*, and has a different flavor than in most modern English and French contexts, where it usually implies inadequacy and pity, as in "a pathetic attempt." In Russian, the word *pateticheskiy* refers to something passionate, emotional, and, as in the original Greek, having overtones of suffering.

The introductory bassoon solo, which crawls slowly through the murky depths of the orchestra, becomes the melodic material for the *Allegro* section's principal theme. The second theme, presented by the violins, is probably the most memorable of the entire work — haunting in its beauty, poignancy and sad lyricism.

The second movement is the famous "broken-backed waltz," limping yet graceful, in 5/4 meter. A Trio section in the middle, also in 5/4, is noteworthy for the steady, pulsing notes in the bassoons, double basses and timpani.

The third movement combines elements of a light scherzo with a heavy march. So festive and exuberant does the march become that one is tempted to stand and cheer at the end, making all the more effective the anguished cry that opens the finale.

The finale's infinitely warm and tender second theme in D major works itself into a brilliant climax and crashes in a tumultuous descent of scales in the strings. The first theme returns in continuously rising peaks of intensity, agitation and dramatic conflict. Finally the energy is spent, the sense of struggle subsides, and a solemn trombone chorale leads into the return of the movement's second theme, no longer in D major but in B minor — dark, dolorous, weighted down in inexpressible grief and resignation. The underlying heart throb of double basses eventually ceases and the symphony dies away into blackness ··· nothingness.

Robert Markow's musical career began as a horn player in the Montreal Symphony Orchestra. He now writes program notes for orchestras and concert organizations in the USA, Canada, and several countries in Asia. As a journalist he covers the music scenes across North America, Europe, and Asian countries, especially Japan. At Montreal's McGill University he lectured on music for over 25 years.

Naoto OTOMO

Conductor

大友直人

指揮

1/22

桐朋学園大学在学中に22歳でN響を指揮してデビュー。これまでに日本フィル正指揮者、大阪フィル専属指揮者、東響常任指揮者、京響常任指揮者、群響音楽監督を歴任。現在、東響名誉客演指揮者、京響桂冠指揮者、琉球響音楽監督、高崎芸術劇場芸術監督。

国外では、ロイヤル・ストックホルム・フィル、フランス国立メス管弦楽団（旧フランス国立ロレーヌ管弦楽団）、カンヌ管弦楽団、トスカーナ管弦楽団、プッチーニ音楽祭管弦楽団、ルーマニア国立放送交響楽団、インディアナポリス交響楽団、コロラド交響楽団などから度々招かれており、ハワイ交響楽団には旧ホノルル交響楽団時代から20年以上にわたり定期的に招かれている。またフィルハーモニア管弦楽団の日本ツアーの指揮者も務めた。東京文化会館の初代音楽監督として東京音楽コンクールの基盤を築いたほか、数々の自主制作の企画を成功に導いた。

幅広いレパートリーでも知られ、なかでも日本を代表する邦人作曲家作品の初演や、ジェームズ・マクミラン作品およびジョン・アダムズのオペラ日本初演などは代表例に挙げられる。大阪芸術大学教授。京都市立芸術大学、洗足学園音楽大学各客員教授。

Since his debut with NHK Symphony Orchestra at the age of 22, Naoto Otomo has led the highly competitive music scene of Japan. He currently serves as Music Director at Ryukyu Symphony Orchestra (Okinawa) and Artistic Director of Takasaki City Theatre, and previously held the posts of Principal Conductor/Music Director at Japan Philharmonic, Tokyo, Kyoto and Gunma Symphony Orchestras, and Osaka Philharmonic. Otomo has appeared repeatedly with Royal Stockholm Philharmonic, National Symphony Orchestra of Romania, Indianapolis Symphony, and Hawaii Symphony and he led Philharmonia Orchestra on its tour to Japan. Well-known for his wide repertoire ranging from classical to contemporary works, Otomo has premiered numerous new works.

プロムナードコンサートNo.394

Promenade Concert No.394

サントリーホール

2022年1月22日(土) 14:00開演

Sat. 22. January 2022, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大友直人 Naoto OTOMO, Conductor
サクソフォン ● 上野耕平 Kohei UENO, Saxophone
コンサートマスター ● 矢部達哉 Tatsuya YABE, Concertmaster

デュビュニョン：アルトサクソフォン協奏曲 op.81《英雄的》

（2021）〔上野耕平委嘱作品／世界初演〕（24 分）

Dubugnon: Concerto Heroïque for Alt Saxophone and Orchestra, op.81 (2021)
[Commissioned by Kohei UENO. World Premiere]

Ⅰ Modéré 中庸の速さで
Ⅱ Lent et expressif ゆっくりと表情豊かに
Ⅲ Moderato 中庸の速さで

休憩 / Intermission（20 分）

ラフマニノフ：交響曲第2番 ホ短調 op.27（60 分）

Rachmaninoff: Symphony No.2 in E minor, op.27

Ⅰ Largo - Allegro moderato
Ⅱ Allegro molto
Ⅲ Adagio
Ⅳ Allegro vivace

※当初の発表から指揮者が変更になりました。

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

〈アンケートのお願い〉

本日はご来場くださり、誠にありがとうございます。今後の参考にさせていただきますので、お客様のご意見・ご感想をお寄せください。お手持ちの携帯電話やスマートフォンなどから２次元コードを読み取りいただくか、下記 URL からもご回答いただけます。

https://www.tmso.or.jp/j/questionnaire/

ヤングシート対象公演（青少年と保護者をペアでご招待）

協賛企業・団体は P.45、募集は P.48 をご覧ください。

Kohei UENO

Saxophone

上野耕平

サクソフォン

©S. Ohsugi

８歳からサクソフォンを始め、東京藝術大学器楽科を卒業。2011年第28回日本管打楽器コンクール サクソフォン部門において、史上最年少で第１位および特別大賞を受賞。2014年第６回アドルフ・サックス国際コンクール（ベルギー）第２位。現地メディアを通じて日本でもそのニュースが話題を呼ぶ。2016年、東京オペラシティのリサイタルシリーズ「B→C：バッハからコンテンポラリーへ」に出演、全曲無伴奏で挑戦し高い評価を得た。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。

現在、国内若手アーティストの中でもトップの位置を占め、演奏活動のみならず、メディアへの出演でも活躍。The Rev Saxophone Quartetのメンバー、ぱんだウインドオーケストラのコンサートマスターを務めている。CDデビューは2014年、最新アルバムは『アドルフに告ぐⅡ』（デンオン）。2018年第28回出光音楽賞、同年第9回岩谷時子賞奨励賞を受賞。

Kohei Ueno made a sensational senior debut winning the 1st prize at 28th Japan Wind and Percussion Competition, youngest ever in its long history. In 2014, he won the prestigious 2nd prize at 6th Adolphe Sax International Competition in Belgium. Ueno continues to challenge new repertoires and pursues all possibilities of the saxophone. His recent activities include not only performances but also media exposure such as taking on radio personality roles and TV engagements. He is a member of The Rev Saxophone Quartet and a concert master of Panda Wind Orchestra.

デュビュニョン：アルトサクソフォン協奏曲op.81《英雄的》（2021）

〔上野耕平委嘱作品／世界初演〕

私が初めて上野耕平さんにお会いしたのは、2017年5月、パリにおいてである。彼はサクソフォン協奏曲の新作を求めていたのだが、2013年4月に東京で演奏された私の作品、2台ピアノと2つのオーケストラのための《バトルフィールド協奏曲》を聴いた印象が強く残っており、もう4年間も私への委嘱を考えてきたとのことだった。

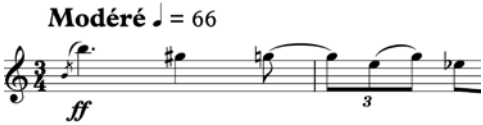
その後2018年6月に、今度はピカルディにある私の自宅を耕平が訪ねてくれた。私たちは作品について話し合いを始めた。彼はアルトサクソフォンで技術的にどんなことができるかを実際に演奏しながら私に教えてくれ、私はたくさんのアルトサクソフォンによる音楽や耕平の録音を聴き、楽器に慣れ親しんでいくことから始めた。というのも、私はこれまでこの楽器のために作曲したことはなく、作曲するならば本当に特別なものを書きたいと思ったからだ。私は耕平の信じがたいほどの才能に強く感銘を受け、彼がどれだけ私の作品に期待を寄せているかも分かっていたので、私はアイディアを振り絞り、知りうる限り最高に英雄的な協奏曲をアルトサクソフォンのために書こうと考えた。

しかし、2020年9月まで私は作曲を始められなかった。新型コロナウイルスが猛威をふるい、それが音楽界にもたらしたあらゆる問題に私は動揺してしまったのだ。それでも2021年3月27日にショート・スコアを書き上げ、5月11日にオーケストレーションを終えた。

第1楽章　Modéré（中庸の速さで）

この協奏曲は第1主題（全曲の主要主題）（譜例1）で幕を開ける。オーケストラ全体は広い音域の和音を鳴らしながら加速し、高音域と低音域の楽器が反行する音型を奏でる。

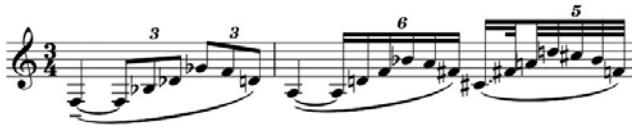
【譜例1】



この短くもドラマティックなオープニングに続いて、**molto lento**（非常に遅く）からサクソフォンが第1主題を奏で、弦とハープを伴いながら、レチタティーヴォのような導入を形成する。このゆったりとしたパッセージを経て、サクソフォンは第2主題（短2度―短3度―短2度―短3度という動きをもつ6音モードを使用している点で第1主

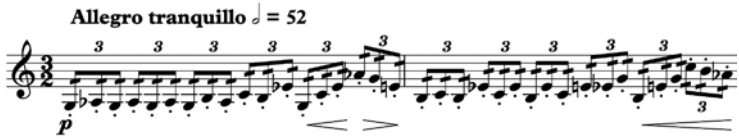
題と関連がある）をゆったりと、次第に加速させて提示する（譜例2）[1]（以下、[ ] の数字はスコアに記された練習番号）。

【譜例2】



サクソフォンが2つの主題に基づいてメリスマティックに（訳注：言葉の1音節に複数の音符を当てる歌唱法のこと）即興的なフレーズを奏でてゆき、短いクライマックスに到達したあと、a tempo moderato（中庸の速さで）から全奏が続く[2]。そこからこの第1楽章の主要部であるAllegro tranquillo（穏やかにやや速く）へと入る。サクソフォンは各小節の終わりで第2主題の引用を示しながら、反復音によって無窮動の動機を奏でる（譜例3）。

【譜例3】



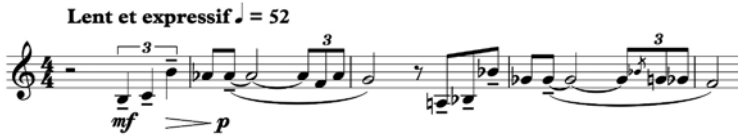
この急速な動きは、すでに提示された2つの主題へと発展し、技巧的なパッセージと穏やかで表情豊かなパッセージとを代わる代わる提示して雰囲気に変化をもたらす。サクソフォンが上行するアルペッジョと高音域でのトリルによって短いクライマックスを形成したあと、*f*—*ff*の長い全奏となる[9]。やがて徐々に落ち着きを取り戻し、3連符による波のような装飾的音型の上で、ソリストは第2主題に基づく歌のような旋律を奏でる[10-14]。クレッシェンドのあと、反復音による荒々しい無窮動の音型が巨大な全奏によって舞い戻り[15]、サクソフォンは急速なスケールを奏でる。

3連符がその流れを止め、シンコペーションのリズムとともに第1主題が再現される[16]。音楽は次第に激しさを増し、poco piú animato（やや快活に）[17-19] からは細かな装飾をまとった第1主題が、低弦のファンキーなリズムを伴って提示され、第2主題に基づくリズミカルなパッセージへと達する[20]。音楽はさらに興奮を高めて、長いグルーヴィーなパッセージを奏で、サクソフォンはシンコペーションのアルペッジョを提示し[21-22]、極端に速いスケールを奏でる[23]。大音量の全奏による第2主題とともにサクソフォンが一連のトリルを吹いたあと、ソリストは短いカデンツァに入り、サクソフォンが出せる最高音の一つ、A♭6へと達する。第2主題に基づく全奏が、[20] ですでに提示されたように続く。第1主題に基づくコーダのあと、この楽章は大きく倒れ込むようにして終わる。

第2楽章　Lent et expressif（ゆっくりと表情豊かに）

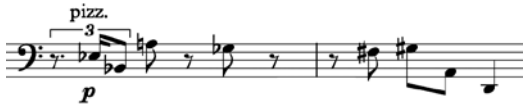
弦がそれぞれ2声部に分かれながら弱音器を付けた状態で、官能的な第3主題を非常に静かに奏でて開始。サクソフォンがそれに続く（譜例4）。

【譜例4】



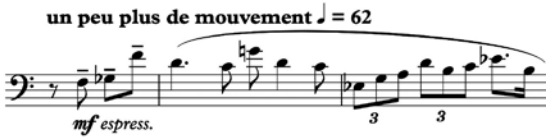
この主題はチェロとコントラバスがピッツィカートで奏でるシチリアーナ風のリズムを持った音型（譜例5）によって強調される。これを第3主題bと呼ぶ。

【譜例5】



第3主題は展開し、装飾され、短いクライマックスを迎える。続いて**un peu plus de mouvement**（やや速く）から第4主題（譜例6）がチェロ独奏によって非常に表情豊かに奏され [28]、低音域の擬似ロマン主義的なハーモニーを伴う。

【譜例6】



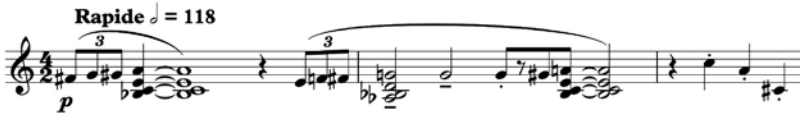
第4主題の長い展開のなかで曲想は情熱と激しさを増してゆき [29-33]、第1主題のいくつかの要素（リズム、冒頭の3度下行、末尾の3連符）も伴う。速いテンポで第4主題に基づく長い全奏に達し、大きく下行するスケールへと加速してゆく。続いてソリストのカデンツァに入る。カデンツァは第4主題に基づいた即興風の旋律に始まり、次に第3主題と第3主題bとを結合させる。ここでは弦楽器のピッツィカートと似た音を出すスラップタンギング奏法が用いられる。このカデンツァは一種のレチタティーヴォのような形で、ところどころでオーケストラを伴う。

徐々に全奏へと回帰してゆくが、まだ第3主題は鳴り続け [36-37]、そこから第4主題の展開へと進み [37-39]、非常に静かで表情豊かな曲想となる。ここでは第4主題の要素はわずかに残されるにとどまる [40]。第4主題とピッツィカートによる第3主題bのシチリアーナ風リズムとの組み合わせがコーダを形成し、この第2楽章を締めくくる。

第3楽章　Moderato（中庸の速さで）

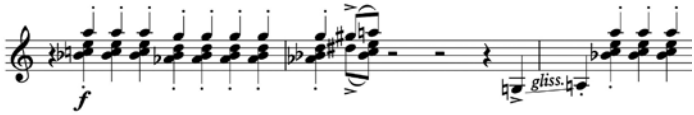
フィナーレはこの協奏曲の冒頭で提示された「壮大な幕開け（grand opening）」と同様に開始するが、最初から独奏サクソフォンが加わる。第1・第2主題が劇的に回帰して、ソリストは再びメリスマティックに旋律を奏でる。ソリストの強烈なトリルの下行分散和音によってそれが収束すると、**Rapide**（急速に）へとソリストが無伴奏で先導し、ウォーキングベース（編集部注：主にジャズで用いられる、歩くような雰囲気のバス進行）[43] を模倣した音型をスラップタンギングで奏する。オーケストラは第5主題となるジャズ風の主題（譜例7）によって応答する。

【譜例7】



ここからはコントラバスとチェロがウォーキングベースを引き受け、ソリストは数小節あとから加わる。音楽は次第にビッグバンド風の主題へ進み、フレーズの終わりはコミカルなグリッサンドを伴う [45]（譜例8）。

【譜例8】



このウィットと驚きに満ちた楽しい音楽は、2つの主題の変奏を提示しながら、次第に熱狂的なパルスを帯びてゆく。さらに興奮を増して*fff*の大きなクライマックス [51-52] に到達する。続いて第2楽章を想起させるゆったりとしたテンポ**Lento**で、第3主題による再現部となり、低弦のピッツィカートが第3主題bで伴奏する。独奏サクソフォンが加わり、第4主題を奏でる [53]。

曲想は情熱を帯びて、もう一つの短い再現部が「壮大な幕開け」[54] によって提示される。そのまま加速してテンポの速いコーダへと突入する。ジャズ風のウォーキングベースを伴って、全奏による第3主題bが最後に驚かせるように登場し、それが*ff*で4回繰り返されて終わりを告げる。

（リシャール・デュビュニョン　ランティニーにて／2021年）

（訳:飯田有抄）

作曲年代：2020〜21年

初　　演：2022年1月22日　東京　サントリーホール（当演奏会）
上野耕平独奏　大友直人指揮　東京都交響楽団

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2（第2はバスクラリネット持替）、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、テューバ、ティンパニ、ハープ、弦楽5部、独奏アルトサクソフォン

リシャール・デュビュニョンと
上野耕平
Photo by Richard Dubugnon

リシャール・デュビュニョン

1968年、ローザンヌ（スイス）生まれ。モンペリエで歴史を学んだ後、20歳で音楽を始め、1992年にパリ音楽院へ入学。さらに英国王立音楽院で学んだ。2002年にフランスへ戻り、ボザール・アカデミーからピエール・カルダン賞を受賞。2015年、SACEM（作詞作曲出版協会）からグランプリを受けた。2016/17シーズンにヴィンタートゥール・ムジークコレギウムのコンポーザー・イン・レジデンスを務めた。

『ニューヨーク・タイムズ』紙が「遊び心のあるモダンな感性」と評した彼の作品は、多くの音楽家によって演奏されている。代表作はアルカナ・シンフォニーズ（2001-07）、ヴァイオリン協奏曲（2008）、2台ピアノと2つのオーケストラのための《バトルフィールド協奏曲》（2011）、交響詩《Helvetia, Alpine Flight》（2013）、チェレスタのオブリガートを伴うピアノ協奏曲《Klavieriana》（2015）、カプリース第3番《Caprice Romain》（2016）、カプリース第4番《Es muss sein!》（2017）など。

また彼はコントラバス奏者でもあり、モーリス・ベジャール・バレエ団での自作品の演奏やパリ・オペラ座でも自由契約で出演している。2021年1月より、パリ高等裁判所の音楽関連法の専門担当を務める。

ラフマニノフ：交響曲第２番 ホ短調 op.27

ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ（1873〜1943）の3曲の交響曲の中で最も規模が大きく、内容的にも充実しているこの第2番は、1903年頃からスケッチが開始されている。1901年のピアノ協奏曲第2番の成功で作曲家としての地位を不動にした時期のことである。しかしロシアの政情不安をはじめとする様々な事情からこの作品に集中することはしばらくできなかった。そして混乱を避けて移り住んだドレスデンで1906年から本腰を入れて作曲に取り組み、1907年に全曲が完成された。

演奏に約1時間要するこの大作は、ロシア的な力強さと暗い叙情、メランコリックな郷愁といった、ラフマニノフのロマン的資質がいかんなく発揮される一方、そうした特質が交響曲にふさわしい論理的構成と結び付けられている。特に第1楽章冒頭の動機が作品全体の循環動機になっていたり、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」の冒頭と同一の動機（この旋律は彼の他の作品の多くにも用いられているが、最近では「怒りの日」の直接的な引用ではないとする説も出されている）が4つの楽章の様々な箇所に現れたりなど、動機的な関連によって全曲の統一が巧みに図られている。各楽章の主要な旋律が他の楽章において回想風に出現したり先取りして示されたりすることで、楽章間の結び付きを有機的なものにしていることも注目されよう。そうした考えられた構成によって激しいまでの感情の起伏が説得力に満ちた表現へと高められており、そこに交響曲作家としてのラフマニノフの優れた力量がはっきり窺える。

第1楽章　ラルゴ～アレグロ・モデラート　ホ短調　長大な序奏に始まるが、その冒頭に示される低弦の音型が全曲の循環動機となって、ここから様々な楽想が派生する。主部はラフマニノフ節というにふさわしいメランコリックな第1主題とロマン的憧憬に満ちた第2主題を中心とする自由なソナタ形式。展開部は劇的な起伏に満ち、その中に主調で現れる第1主題が展開のうねりの中に飲み込まれて大きな頂点を築いて、第2主題に始まる再現部に続く。

第2楽章　アレグロ・モルト　イ短調　スケルツォに相当する楽章で、主部のホルンによる力強い主要主題には前述の「怒りの日」に似た動機が織り込まれている。副主題は対照的に甘美な性格のもの。一方トリオにあたる中間部では主要主題を変形した主題によるフガートが展開する。

第3楽章　アダージョ　イ長調　ロシア的情感に満ちた3部形式の緩徐楽章。主部は、ヴァイオリンの表情豊かな導入主題に始まって、クラリネットが息の長い叙情的な主題を綿々と歌う。ラフマニノフらしい耽美的な旋律だ。中間部は音型的な主題（循環動機と関連している）が中心となる。

第4楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　ホ長調　一転してお祭り騒ぎのような賑やかな自由なソナタ形式によるフィナーレで、乱舞風の第1主題、行進曲調の副次的な楽想、朗々とした第2主題などをもとに華やかに発展し、展開部では第3楽章や第1楽章の主題も組み合わされる。再現部はさらなる高揚を示し、そのエネルギーはコーダで最高潮に達して輝かしく全曲を閉じる。

（寺西基之）

作曲年代：1903年頃～1907年

初　　演：1908年2月8日（ロシア旧暦1月26日）サンクトペテルブルク
アレクサンドル・シロティ指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ3（第3はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、弦楽5部

Dubugnon:
Concerto Héroïque
for Alto Saxophone and Orchestra, op.81 (2021)

Editions Peters
dedicated to and commissioned by Kohei Ueno
World premiere in Tokyo, 22 January 2022 by the dedicatee, Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra, Naoto Otomo (conductor)

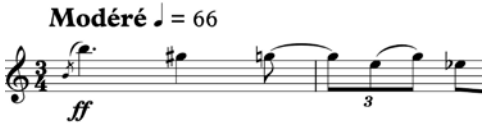
2 Flutes (2nd doubling Piccolo), 2 Oboes, 2 Clarinets in Bb (2nd doubling Bass Clarinet), 2 Bassoons, 2 Horns, 2 Trumpets, 2 Trombones, Tuba, Timpani, Harp, Strings, Solo Alto Saxophone

I met Kohei Ueno in May 2017, in Paris. He came to see me because he wanted a concerto and remembered listening to my *Battlefield concerto* in Tokyo in April 2013, which made a strong impression on him and he kept this commission as an idea in his mind for four years.

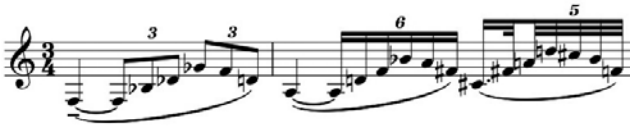
Later, in July 2018, Kohei came to my house in Picardie and we started discussing the piece and he demonstrated what he could technically do with the Alto Sax. I started listening to a lot of Alto saxophone music and to his recordings, to get acquainted with this instrument, because I hadn't written for this instrument before and I really wanted to make it special. I was very impressed by the incredible talent of Kohei, and knowing his great expectations from me, my idea was (humbly) to try to write the most heroic concerto that we might know for the Alto saxophone.

However, I didn't start composing it before September 2020, as I felt distraught by the beginning of the Covid crisis and all the professional problems it created in the music world. I finished the short score on March 27th and orchestrated the score by May 11th 2021.

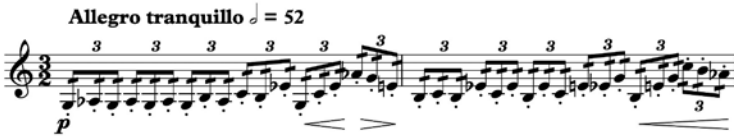
I. Modéré (moderato) the concerto opens on the main theme, with the whole orchestra playing large chords in accelerando, the high and the low instruments going in contrary motion:



After this short dramatic opening, the saxophone comes in playing the main theme accompanied by the strings and the harp, a tempo **molto lento,** in an introduction resembling a *recitativo*. In this slow passage, the saxophone also plays the 2nd theme (related to the 1st theme by the use of a 6-note mode: ½ tone – 1 ½ tone - ½ tone – 1 ½ tone etc.), slowly and in accelerando (Fig. 1):



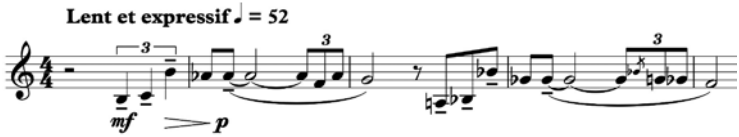
The saxophone plays more and more melismatic improvisatory phrases on those two themes, before reaching a short climax which is followed by a tutti **a tempo moderato** (Fig. 2). This leads into the **Allegro tranquillo**, the main part of this first movement, where the saxophone plays a *moto perpetuo* motif in repeated notes, quoting the 2nd theme at the end of the bar:



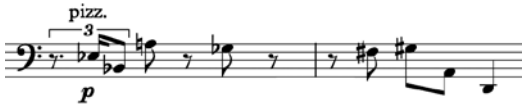
This fast movement develops the two themes we previously heard, with some changes of mood, alternating virtuoso passages with more calm and expressive ones. After a short climax where the saxophone plays the 2nd themes in ascending arpeggios and very high trills, we hear a long tutti ***f*** - ***ff*** (Fig. 9) which progressively calms down, introducing a passage with decorating waves of triplets on top of which the soloist plays a cantilena based on the 2nd theme (Fig. 10-14). After a crescendo, the fierce *moto perpetuo* with repeated notes comes back in a big tutti (Fig. 15), then comes the saxophone playing fast scales.

The triplets stop and the music becomes syncopated, with the return of the 1st theme (Fig. 16). The music is more and more agitated, **poco più animato** (Fig. 17-19) with *funky* rhythms in the lower strings accompanying the 1st theme with small ornamentations and which culminate in a short rhythmical passage based on the 2nd theme (Fig. 20). The music becomes even more agitated in a long *groovy* passage where the saxophone plays syncopated arpeggios (Fig. 21-22) and extremely fast scales (Fig. 23). After playing a series of trills accompanied by the 2nd theme in a very loud tutti, the saxophone plays a short cadenza reaching A♭6, one of the highest possible notes on the instrument. A tutti based on the 2nd theme follows, similar to what we heard previously at Fig. 20. This movement ends in a big collapse, on a coda based on the 1st theme.

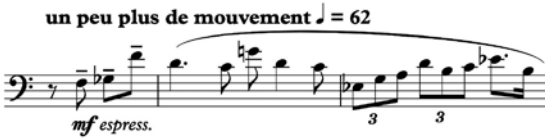
II. Lent et expressif (slow and expressive) begins very quietly with muted divided strings, playing the sensuous 3rd theme of this concerto, then followed by the soloist:



This theme is punctuated by pizzicati in the celli and double basses on a *Sicilienne* rhythm, that we shall call Theme 3b:



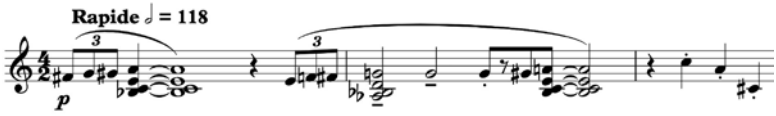
This music is developed and ornamented and comes to a short climax, which is followed by the 4th theme of the concerto, played by the solo violoncello (Fig. 28) **un peu plus de mouvement** (a little faster) which is very expressive with quasi-romantic harmonies underneath:



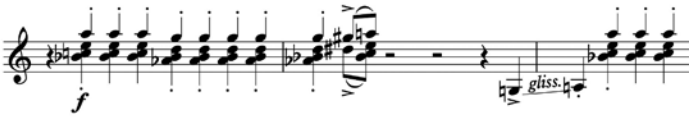
The music is passionate and more and more agitated (Fig. 29-33) in a long development based on the 4th theme, with some elements of the 1st theme (the rhythm and descending thirds of its beginning and the ending triplet). It reaches a long tutti based on the 4th theme at a faster tempo, which accelerates into a big descending scale. This is followed by a *cadenza* of the soloist, who begins improvising on the 4th theme, then combines the 3rd theme with 3b, playing slap-tonguing effects to imitate pizzicati. This *cadenza* is in some places accompanied by the orchestra, in a kind of *recitativo*.

The tutti comes back progressively, still playing the 3rd theme (Fig. 36-37) then moving on to a development of the 4th theme (Fig. 37-39) leading to a very quiet and expressive moment, which is more remotely based on the same theme (Fig. 40). This 2nd movement ends on a coda based on the 4th theme combined with the *Sicilienne* rhythm in pizzicato (3b).

III. Moderato This finale begins with a similar "grand opening" that we had at the beginning of the concerto, with the addition of the soloist from the very beginning. The 1st and 2nd themes come back in a dramatic way, again with some melisma played by the soloist which end into obsessive trills in a descending arpeggio. The **Rapide** (fast) movement begins with the soloist alone, playing a series of slap-tonguing effects which imitate a walking bass (Fig. 43). The orchestra answers with the *jazz* inspired 5th theme of the concerto:



This time the double basses and violoncelli take over the walking bass and the soloist joins in after a few bars. The music comes progressively to another theme, more inspired by music for Big Band, with comical glissando effects at the end of the phrase (Fig. 45):



This joyous music, full of wit and surprises, displays a series of variations on those two themes in a progressively more frantic pulse. The music becomes even more agitated and reaches a big climax ***fff*** (Fig. 51-52) which is followed by a recapitulation of the 3rd theme of the concerto at a slow tempo (**Lent**) reminiscent of the 2nd movement, here played by the lower strings with the theme 3b as an accompaniment in pizzicati. The saxophone enters, playing the 4th theme (Fig. 53).

The music becomes more passionate and leads to another brief recapitulation of the "grand opening" (Fig. 54) which accelerates and bring us to the fast ending coda of the concerto, which is based on the *jazzy* walking bass and a last surprising appearance of the theme 3b in tutti, repeated 4 times ***ff*** as a conclusive statement.

©Richard Dubugnon, Rantigny - 2021.

Richard Dubugnon and Kohei Ueno
Photo by Richard Dubugnon

Richard Dubugnon was born in Lausanne (Switzerland) in 1968. He started music at the age of 20 after reading History in Montpellier and was accepted into the Paris Conservatoire in 1992. Dubugnon further studied at the Royal Academy of Music in London. When he returned to France in 2002, he became the recipient of the Pierre Cardin Prize from the Académie des Beaux

Arts in Paris. In 2015 he was awarded the Grand Prix SACEM. For the 2016/2017 season Richard was composer-in-residence with the Winterthur Musikkollegium. Described as "driven by a playful modern sensibility" by the New York Times, Dubugnon's music has been performed by many musicians. His masterpieces are *Arcanes Symphoniques* (2001-07), Violin Concerto (2008), *Battlefield Concerto* (2011) for two pianos and double orchestra, The tone poem *Helvetia, Alpine Flight* (2013), *Klavieriana* (2015), a concerto for piano, orchestra and "celeste obbligato" , Caprice III *Romain* (2016), and Caprice IV *Es muss sein!* (2017), among others. Richard is also a double bass player, who performed his music with the Béjart Ballet and freelanced with the Paris Opéra. Since January 2021, he is Legal expert in music at the Court of Appeal in Paris.

Rachmaninoff: Symphony No.2 in E minor, op.27

Ⅰ Largo - Allegro moderato
Ⅱ Allegro molto
Ⅲ Adagio
Ⅳ Allegro vivace

Sergei Rachmaninoff: Born on the estate of Oneg, near Semyonovo, April 1, 1873; died in Beverly Hills, March 28, 1943

Few symphonies written in the twentieth century achieved the fame and popularity of Rachmaninoff's Second, composed in Dresden where the composer had gone in 1906 to escape the demands of public life in Moscow. The hour-long work was fully sketched by New Year's Day of 1907. Revisions and orchestration took place over a longer period, both back home in Russia and during a return visit to Dresden. Rachmaninoff agreed to conduct the first performance, which took place on January 26, 1908 in St. Petersburg. He also led the Moscow premiere a week later, and an early American performance with the Philadelphia Orchestra in November, 1909. In each case the audience responded enthusiastically, and the symphony has enjoyed an unbroken run of popularity to this day. The score is dedicated to the composer Sergei Taneyev. Rachmaninoff himself authorized certain cuts in performance, and the expansive nature of the work has led many conductors to do their own editing, resulting in performances that may last anywhere from 38 minutes to over an hour. In May 2014 the manuscript score was auctioned by Sotheby's for £1,202,500.

Most of the melodic material of the symphony derives from a single

motif, heard in the opening bars in the somber colors of low cellos and basses. In a multifarious variety of guises and transformations, this "motto" haunts the entire symphony in both obvious and subtle ways, thus infusing it with coherence and compelling impetus. After its initial statement, the motto passes to other instruments, eventually giving birth to a sinuous violin phrase that grows to an impressive climax as it weaves its way through lushly orchestrated textures and luxuriant counterpoint. The main *Allegro moderato* section of the movement is ushered in with a shivering, rising figure in the strings. Violins then spin out a long, winding, aspiring theme based on the motto. The delicate, gentle second theme, divided between woodwinds and responding strings, also derives from the motto.

The second movement, a scherzo, is built on the motif of the *Dies irae*, the medieval Gregorian chant for the dead. Four horns in unison proclaim a boldly exuberant version of the *Dies irae*, which itself has its seeds in the symphony's motto. Two contrasting ideas of note are the warmly flowing lyrical theme for the violins and a brilliant fugato section that demands the utmost in virtuosity from the strings.

The *Adagio* movement is one of the lyric highlights of all Rachmaninoff. No fewer than three gorgeous melodies are heard, beginning with one of the most popular ever written. Following immediately on this theme of great repose and tranquility comes one of the glories of the solo clarinet repertory – an extended theme full of ardent longing. American pianist Arthur Loesser wrote in 1939 that this music "gives off a vapor of drugged sweetness, of fatalistic melancholy."

The enormously energetic finale too is a broadly expansive movement, beginning with a boisterously robust idea that might easily conjure up the spirit of a *kermesse* (Russian carnival). This is followed by a dark, grim, march-like episode in the seldom-used key of G-sharp minor, then by another of the composer's most famous themes – a magnificent, soaring affair that sweeps onward over an expanse of more than one hundred measures. Quiet reminiscences of the first and third movements lead to the development section. One of the symphony's most thrilling passages occurs in this section, where the tintinnabulating effect of St. Petersburg's great bells is recreated in orchestral terms — a slow accretion of descending scales at different speeds, registers and rhythms that culminates in a dense and spectacular swirl of notes. The recapitulation follows, and Rachmaninoff's longest, grandest, most expansive symphonic work ends in a veritable blaze of sound.

(Robert Markow)

For a profile of Robert Markow, see page 17.